

# 加藤清正の実像



天正20年(文禄元年=1592)5月3日に漢城(朝鮮の都、現在のソウル)に入った清正率いる第2軍。その後、続々と日本軍が漢城に到着し、今後の方針について話し合いが持たれた結果、明国への即時侵攻は見送られることになりました。

## 〈14〉朝鮮出兵 - 八道国割から漢城撤退まで -

漢城に入った日本軍の諸将は、秀吉が掲げる明国への侵攻をひとまず中断して、まずは侵攻の足掛かりとなる朝鮮の安定的統治を優先させます。朝鮮を8つの地域に分けて、それぞれ武将を配置して統治させる、いわゆる「八道国割」と呼ばれるものです。話し合いの結果、清正率いる第2軍は朝鮮半島の北東部の咸鏡道ハムギョンドを、行長率いる第1軍は北西部の平安道ピョアン道を担当することになりました。5月16日に漢城を北に向けて出発した第1軍と第2軍は27日に臨津江イムジンガンを渡り、29日に開城ケソンを占領します。ここまでは清正と行長は共同作戦をとっているようです。しかし、開城入りした清正としては一刻も早く担当地域の咸鏡道へ向かいたかったようで、書状の中で「開城では軍勢が話し合いと称して長いこと留まっており、私としては非常に迷惑している。先を急がないと秀吉様に何と思われるか」と述べ、はやる気持ちを抑えきれない様子おさがうかがえます。おそらく、清正は朝鮮の王子らが咸鏡道方面へ向かったという情報を早い段階で掴んでいたのでしょう。

清正一行は、宝山ボサンから東に進路をとり、6月17日に安辺アンピョンに入ります。その後、北へ進路を変え、24日に咸興ハムフン、7月17日には城津ソンジン付近まで進軍しています。そして、ついに7月23日に会寧フェリョン付近で朝鮮の2人の王子、臨海君イムヘグンと順和君ヌンファクの身柄を確保します。実際には清正軍が捕らえたわけではなく、地元の反朝鮮王朝勢力が王子一行を捕らえ、清正に密告して身柄を引き渡したようです。このことがよほど嬉しかったのか、清正は王子捕縛ほぼくの知らせを秀吉はもちろん、ほかの武将らにも喧伝けんてんしています。

そして、7月末に会寧を出発した清正は、その後1か月間、豆満江ドウマンガンを越えてオランカイオランカイ\*と呼ばれる地域へ遠征し、明国へ侵攻するためのルート視察をおこなっています。8月22日に再び鏡城フクチョンへ戻り、南へ下って北青、咸興を経て、安辺に入ります。翌年2月まで清正はここを本拠地として咸鏡道の統治に専念して、秀吉の命令でもある安定的な年貢の徴収や規律の厳守を家臣たちに徹底させます。このあたりから清正に心情の変化が見られ、当初は明国への即時侵攻を目指していましたが、オランカイ遠

征で朝鮮半島の広大さを身をもって感じ、日本への報告の中で「朝鮮は思いのほか広い」「私は安辺に留まり、しばらくは咸鏡道の統治に専念しようと思います」と考え方が変わっています。また、他地域の戦況も耳にしていたようで、小西行長が担当する平安道の苦戦、劣勢ぶりを皮肉りつつ、「このままだと明国への討ち入りは難しい」と現実的に明国への侵攻は難しいと考え始めます。

しかも、この頃になると明国による朝鮮救援軍の派遣が始まり、日本軍は敗戦が続き、各拠点からの撤退を余儀なくされます。咸鏡道の清正軍も例外ではなく、はじめは協力的だった地元勢力が次第に朝鮮軍へなびいていったことで反撃に遭い、また、現地での寒さや飢えも重なり、非常に苦しい状況に陥ります。

こうした状況の中、年が明けて文禄2年1月7日に小西行長が平安道の平壤ピョンヤンから撤退を始め、16日に漢城まで後退します。このほかの諸将にも撤退命令が出て、1月末までに続々と漢城へ再集結し、今後の対策について協議します。清正は、最後まで咸鏡道に固執しますが、ついに撤退命令に従わざるを得なくなり、2月21日に安辺を出発して、29日に漢城へ入ります。しかし、清正が到着する前には、漢城からの一時撤退などがすでに決められており、日本軍は4月18日に撤退を開始します。1年前、釜山プサン浦に上陸した際、約10,000人いたと思われる清正の軍勢は、漢城撤退直前の3月末には5,492人と半減しており、日本軍がいかに過酷な戦いを強いられていたかが分かります。

\*オランカイ…朝鮮半島北方にある女真族が住む地域。



このコーナーは、大浪おきなみ和弥かずやさん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。